

幼児の四季

春



上 沢 謙 二

日本にははっきりした四季がある。日本の子どもは合せた。春、夏、秋、冬——自然はちがった顔と姿をもつて、子どもたちに話しかけ、子どもたちをめぐり包む。一年じゅう暑いところ、寒いところにくらべると、なんと、より深く、よりゆたかに、自然を識り、自然に親しみ、自然を楽しむことができるだろう。

自然に対する教育が、人間に——特に幼児に必要で大切であるならば、日本の自然は「幼児教育的」だともいえよう。

そうして春だ。今や、春だ。

草は萌えだす、木は伸びだす、蛇もとぐろを解いて這いだす。すべてのものがうごきだす春だ。

それは束縛からの解放を意味する。人間界の解放は百年千年かかってもなかなか成就しないが、自然界の解放は一時に、一斉に、実現する。

希くは、せめて、一生のうちのこの幼児の時代だけでも、一年のうちのこの春の時季において、うんと解放してやりたい。

精いっぱい、我を忘れて、とばせよ、走らせよ、昇らせよ、滑らせよ。時には、ころんでも、ぶつかっても、泣きだしても、争いがはじまっても。

それを恐れて、かげんしたり、控え目にしたり、制限したりするとすれば、それこそ、春の中にありながら、春の心に叛逆するものである。

ころんだら、すぐおきあがる。ぶつかったら、おたがいに「ごめん」という。泣きだしても、じぶんで泣きやめる。争っても、やがて「えへへい」と笑い出す。それが「春の心」である。周囲が、全体が——幼稚園の雰囲気春の心になっていけば、おのずからそうなるのである。

春の心がひしひしと胸に湧くと、じっとしておれない。誰も彼も活動をはじめめる。

しばしもじっとしておれないのが幼児である。それが春に遇ったのだから、活動しないではおられない。

活動は成長を意味する。幼児はこの春において、一段と成長する。その具体的なシンボルが「幼稚園への入園」である。

幼児はそれによって、まったく新しい世界へ進む。そこは、活動によって成長するようにつらわれ、仕向けられる世界である。このはっきりした成長への参加が、夏でない、秋でない、冬でない、春においておこなわれ

るといふことは、まことに意義深いといわねばならない。

彼らは春にふさわしい逞ましい活動力によって、この新しい世界の新しい事態を、ひるまず乗りこえていく。

句がある。

「掃きだめの草も彌生の景色かな」

春はあらゆるものを美化する。掃きだめに棄てられたものが、すえて、腐って、そこに草がはえた。これがほかの季節ならともかく春だからこそ、なんとなく風情を生じて、一つの「景色」になる。

アメリカの教育家ストーナー夫人だったと思うが、子どもたちに「美しいものを見つけてごらん」といった。

春の朝はうららか。子どもたちはよろこんで四方に散って、いろいろな花をつんできたが、ひとりの幼児は「先生、きれいなもの見つけた。きて見て」という。

「なにか」と思って、ほほえみながらついていくと、路のべを指さして「これ」という。

そこにはなにがあったか。ひとかたまりの馬糞である。日光がさんさんとあたって反射している。それはあたかも宝石の重なりと見られた。幼児は、そこに「美」を発見したのである。夫人のほほえみはますます深くなった。

幼児の曇りない目に「美」をうつさせ、邪気のない心に「美」をしみこませる美的指導のふさわしい時は、まさに春ではなかるうか。

幼稚園の庭の隅。

あたたかい日ざしの地面へ、小さな地虫が一ぴき出てきた。そうしてゆるゆると這っていく。

ふと、それを見つけたAちゃんはしゃがんだ。だまってにこにこしながら、それに見入った。地虫が進むに連れて、しゃがんだまま足ずりしてうごいていく。

向うの隅から、また一ぴき、地虫が出てきてゆるゆると這っていく。

ふと、それを見つけたBちゃんは、しゃがんだ。だまってにこにこしながら、それに見入った。地虫が進むに連れて、しゃがんだまま足ずりしてうごいていく。

やがて、地虫と地虫とゆき遇った。両方とまって、かすかに頭をふったのは、なにか話しあったのだろうか、二ひきはおなじほうへ、むくむくと這いだした。

地虫がゆき遇うと共に、AちゃんもBちゃんもゆき遇った。たがいに顔を挙げて目を見あわせると、にっこりした。が、そのままだまって、二ひきのあとについて、しゃがんだままうごいていった。

あたたかさは波のようにあたりに充ち満ちて、二人と二ひきはその中に浮かんでいるように見えた。

あたたかさはすなわち親しさである。あたたかい場は、心は、触れるものを親しませずにはおかない。そうして「あたたかさ」「親しさ」こそは、幼児教育の根本である。

春は、幼児も、保育者も、おのずからこの根本にひきあわされる。

ありがたい、意味深い、春ではある。